宮崎国際大学教育学部紀要『教育科学論集』第 10 号（2023）104-114 頁

小学校教員を目指す宮崎国際大学教育学部生への英語初期指導の在り方
―教養英語「英語Ⅰ」の授業実践報告―

富髙 啓順

１．はじめに

本学教育学部のカリキュラムにおける英語関連の開講授業科目は、1 年次で「英語Ⅰ」（必修）「英語Ⅱ」（選択）「英語コミュニケーションⅠ」（必修）、2 年次で「英語コミュニケーションⅡ」（必修）「英語」（必修）、3 年次で「英語科教育法Ⅰ・Ⅱ」（必修）「Special Studies in English Ⅰ・Ⅱ」（選択）となっている。カリキュラム・ポリシーには「英会話力…を培う」、ディプロマ・ポリシーには「基礎的な英会話…を身につけている」と明示されている（宮崎国際大学 2023）。また、教育学部生の多くが受験する本県の小学校教員採用選考試験の一次試験では専門科目が、二次試験においては英会話が課されている。

小中高大と連続する外国語（英語）学習を考える中で、大学教育入門期の教養英語「英語Ⅰ」において、学生の英語力、高校までの学習体験、英語に対する意識などを踏まえつつ、その後の英語や教科教育の専門の学びだけでなく教員として授業力を高めていくことにつながるような授業を提供することは重要であると考える。

本稿では、2023 年度前期に実施した教養科目「英語Ⅰ」の授業内容と学生アンケートを基に、本学における大学入門期の英語の授業実践について報告する。

２．学生の英語力及び英語学習体験

「英語教育実施状況調査」は、毎年文部科学省が行っている公立小学校、中学校及び高等学校等における英語教育の状況についての調査である。本年度前期に「英語Ⅰ」を履修した学生の多くが英語力調査の対象となる高校 3 年生であった令和 4 年度調査結果（文部科学省 2023）と学生へのアンケート調査結果とを比較することで学生の英語力及び英語学習体験を概観する。ただし、「英語教育実施状況調査」の回答者は教員である一方、アンケート調査の回答者は学生であることを踏まえておく必要はある。なお、アンケート調査対象者は、「英語Ⅰ」履修者 60 名のうち協力依頼に同意した 48 名である。

学生の出身学科は、英語の単位数が比較的多い普通科が全国の 49.1％と比較して 75.0％と多い（表 1）。このことから、英語の学習成果を測る外部検定試験の一つとして、また、進学及び就職の際の評価対象になり得る「英検」を受験する機会が多かったことが予想される。

表 1　調査対象の学校における学科の設置状況。但し、本学生については、出身学科の割合

学科	全国	宮崎	本学
普通科	49.1%	―	75.0%
英語教育を主とする学科及び国際関係に関する学科	3.0%	―	4.2%
その他の専門学科及び総合学科	47.9%	―	20.8%

昨年度末に 5 年の終期を迎えた第 3 期教育振興基本計画（文部科学省 2018）においては、英語力について、高等学校卒業段階で CEFR の A2 レベル、英検換算では準 2 級以上を達成している高校生の割合を、目標値 5 割以上としていた。このレベルを達成している学生の割合は全国平均の 48.7%を 50.1%と若干上回っている（表 2)。ちなみに、アンケート回答時の学生の英検取得状況は、2 級 18.8%、準 2 級 31.3%、3 級 10.4%、4 級又は 5 級 6.2%、残り 3 分の 1 は未取得となっている。

表 2　高校 3 年生に所属する生徒のうち、CEFR A2 レベル（英検準 2 級など）相当以上を取得しているか、CEFR A2 レベル相当以上の英語力を有すると思われる生徒の割合。但し、本学生については、英検準 2 級以上を取得している学生の割合

全国	宮崎	本学
48.7%	47.8%	50.1%

次に、高校 1 年次の英語の授業に占める「言語活動」の割合は、全国および宮崎県のそれをいずれも上回っていることがわかった（表 3)。ただし、高校 1 年生の英語の授業について、「話すこと」及び「書くこと」を評価する、スピーキングテスト及びライティングテスト等のパフォーマンステストの実施状況は 33.3%にとどまり、指導と評価の一体化が不十分であることがうかがわれる（表 4)。

表 3　高校 1 年生の英語の授業について、「言語活動」*が授業時間の 50%以上を占めている割合

全国	宮崎	本学
52.9%	42.7%	58.3%

注)「言語活動」とは、情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするために英語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの活動のこと。

表 4　高校 1 年生の英語の授業について、「話すこと」及び「書くこと」を評価する、スピーキングテスト及びライティングテスト等のパフォーマンステストの実施状況

全国	宮崎	本学
56.8%	58.2%	33.3%

また、「CAN-DO リスト」形式による学習到達目標が「高校時代にあった」と認識している学生の割合は 14.6%となっており、全国及び宮崎県での設定率がほぼ 100%であることを踏まえると、高等学校段階において目標を意識した学習が十分行われていない可能性が考えられる（表 5)。自らの学習を調整しようとする態度である自己調整力やメタ認知能力を高め、「自律した学習者」（尾関直子 2013）になるためには、学習到達目標を授業シラバスに明示するだけでなく、授業開きのオリエンテーションや日頃の授業で意識させることが必要であると思われる。

高校の英語の授業における ICT 機器の活用状況及び具体的内容に関しては、「教師がデジタル教材等を活用した授業」が全国で 98.3%、宮崎県で 100%、学生の回答は 7 割を超えている（表 6)。しかし、他の比較可能な全ての項目において学生の経験値は顕著に低くなっている。高校では実際に活

表 5　「CAN-DO リスト」形式による学習到達目標の設定及び公表状況。但し、本学生については「CAN-DO リスト」形式による学習到達目標が「高校時代にあった」と認識している学生の割合

	全国	宮崎	本学
設定している	93.5%	100%	14.6%
公表している	60.4%	58.3%	

動が行われているものの、学生が十分に認識していない可能性、あるいは、高校での活動実態が学生の印象に影響を与えるほど十分ではない可能性が考えられる。いずれにしても、学生が教壇に立つ近い将来のことを考えると、大学での学修において、生成 AI の利用を含め、学習者としての立場で ICT 機器の活用を多く体験することが、指導者になった時の ICT 機器活用に対する積極的態度の育成につながるとともに、技術習得への精神的ハードルを下げる可能性が大きいと予想される。

表 6　高校の英語の授業における ICT 機器の活用状況及び具体的内容

具体的な活用の内容	全国	宮崎	本学
教師がデジタル教材等を活用した授業	98.3%	100%	70.8%
生徒が１人１台端末を活用した授業	－	－	25.0%
生徒がパソコン等を用いて発表や話すことにおけるやり取りをする活動	86.9%	88.6%	14.6%
生徒による発話や発音などを録音・録画する活動	69.6%	71.4%	6.3%
生徒がキーボード入力等で書く活動	78.3%	80.0%	10.4%
生徒が電子メールや SNS を用いたやり取りをする活動	28.3%	28.6%	4.2%
生徒が遠隔地の児童生徒等と英語で話をして交流する活動	19.8%	28.6%	8.3%
遠隔地の教師や ALT 等とティーム・ティーチングを行う授業	13.7%	22.9%	2.1%
生徒が遠隔地の英語に堪能な人と個別に会話を行う活動	11.4%	11.5%	8.3%

３.「英語Ⅰ」の授業の在り方に関する視点

授業開始時期の挙手等による観察では、学生の英語や英語学習に対する印象や態度はどちらかというと自信がなく肯定的とは言えない反応がみられた。全国規模の継続調査によれば、授業で「話す」及び「書く」の両方の活動をしていた生徒は、高校までに自分の英語力が向上した、あるいは英語学習に対して前向きに感じている割合が高いとの結果が示されている（東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所 2022)。文部科学省の調査結果と比較して、CEFR レベルにおける学生の英語力については顕著な差はないものの、学生は高校時代にパフォーマンス評価を体験した割合が低く、自己の学習を意識的に調整する機会は多くはなかったと考えられる。

教育学部の学生の多くが、将来小学校教員を目指している。「小学校外国語」の目標は、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ，外国語による聞くこと，読むこと，話すこと，書くことの言語活動を通して，コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を…育成することを目指す」とある（文部科学省 2018)。“Wear the student’s hat（生徒の立場に立つ）”という表現があるが、時には、 “Wear the teacher’s hat（先生の立場に立つ）”ことを大学の授業では意識させたい。そうする中で、自分の英語力が向上した、あるいは英語学習に対して前向きに感じる学生が少し

でも増えるような授業づくりを目指したい。

４.「英語Ⅰ」の授業の一例

(1) テキストについて

2023 年度前期「英語Ⅰ」で使用したテキストは、英国人の先生と日本人大学生が英国を旅行する中で、歴史や文化、ファッションや食べ物など、英国が持つさまざまな側面について学ぶ過程に関する対話文、会話表現、語彙、読解、作文などを通して、語彙力や表現力を身に付けることを意図して編集されている。

(2) 授業構成

1) 前時の振り返り
2) 小テスト
3) Today's Goal
4) Listen to the Dialogue
5) Expressions for Everyday English
6) Useful Vocabulary
7) Reading・Reading Comprehension
8) 英作文発表
9) Writing Exercises
10) 振り返り

(3) 授業構成及び学生アンケートの結果

授業構成と、学生アンケートから「1 よくない」「2 改善の余地がある」「3 どちらでもない」「4 よい」「5 とてもよい」の 5 段階法での平均値と要約意見を示す（表 7－1～9）。

1) 前時の振り返りについて

前時の授業の終わりに行った振り返りで出された質問について扱った。内容としては、文法や語彙、表現の別解やテキストの解釈の仕方、学習した社会的・文化的事項についてのものが主であった。代表的な質問については、スクリーンに示すとともにスライドシートを配布することで授業の最初に全体で共有し、丁寧な解説によるフィードバックを心掛けた。

表 7－1 前時の振り返りについてのアンケート結果

【平均値】内容：4.2　方法：4.2

肯定的意見	・文法や語法など高校までに習ったことが理解できているか確認できたり、知らなかったことを知ることができたりしたので良かった。スライドはプリントにして配られたので、見えにくいところがあってもプリントで確認したり、書き込んだりして授業を受けることができた。 ・みんなが疑問に思ったことを共有してもらえることで自分も理解することができた。
改善意見	・スライドの文字の色が多く、少し見づらかった。

2) 小テストについて

小テストは、単語 4 問と語句並べ替え英作文 3 問とし、単語は 1 問 1 点、英作文は 1 問 2 点の計 10

点満点とした。単語は、Useful Vocabulary の 10 個から 4 つ選び、それぞれ Reading のテキスト部分から抜き出した英文の空所を 4 択で適語を補充する形式とした。並べ替えについては、Expressions for Everyday English の例文から 1 問、Writing Exercises から 2 問出題し、並べ替える語又は句に割り当てた番号を答えさせた。採点や学生へのフィードバックの簡便さと記録の利便性に鑑み、Google フォームを使用した。全 14 回の平均得点は 7.6 点であった。

表 7−2 小テストについてのアンケート結果

【平均値】内容：4.2　方法：4.0

肯定的意見	・小テストをすることで授業の理解度を自分で確認することができた。またできなかったところを覚えようという気持ちになった。 ・単語のみ答えるのではなく、連語で答えるものや、並べ替えの問題など、構成がとても良かった。ただ覚えるだけでなく、使い方を同時に理解することができた。 ・自分や相手が採点する時間がなくなったので効率がいいと思った。
改善意見	・回答後にすぐに正解不正解が分かるが、場合によってはカンニングしたりする人も出てくるし、英語の力以外で間違う人がいるかもしれない。 ・Google フォームがなかなか届かなかったり、合っていても全角入力だったら「間違い」になったりということがあったので Google フォームがいいとは言えない。 ・Google フォームの解答が間違っていたことがあった。

3) Today’s Goal について

本時の目標を確認することで、先を見通した学習の手助けとなるよう、身に付ける知識や内容と何ができるようになるのかという技能を示すことを心掛けた。例えば、ある日の授業の「本日のめあて」は、次のように示した。

① 英国人と甘いものの関係及び「フェアトレード」について知る
② I’m afraid（that）を使って、良くないことや相手に対し無作法になることを伝える際に、内容を和らげたり、遠慮がちに尋ねたりできるようになる

なお、この節の項目についてのアンケートの問いは設けなかった。

4) Listen to the Dialogue について

まず、各章のタイトルと日本語リード文から内容を推測させた。120 語程度の英国人の先生と日本人大学生の対話文の主な内容に関する簡単な問いを 2〜3 示して、CD の音声を聞かせ、問いに対する回答をペアで共有してから全体で確認した。対話文には毎回 6 か所語句補充の空所が設けられていることから、次に、再度音声を聞かせ、対話文の空所に英語を書き込ませた。空所を埋めるための語句については、聴きとった音声と綴りや語彙、文法上の整合性を検討するようペアに指示し互いに確認させてから、全体で答え合わせを行った。

概要が理解できたら、スラッシュリーディングなどチャンク単位（まとまった意味単位であるセンスグループ）の英語を音読練習させた。方法としては、まず指導者の後について 1 文ごと、英文が長い場合はセンスグループごとに英文を音読させた。その後、指導者がチャンク単位で読み上げる英語

を一時的に頭の中に入れ（read)、声に出している際は視線を上げて文字から目をそらし（look up）文字情報を音声化させるトレーニングである Read and Look Up を行った。

表 7−3 Listen to the Dialogue についてのアンケート結果

【平均値】内容：4.3　方法：4.4

肯定的意見	・はじめに質問を知ることで何を意識して聞けばいいのかがわかる。 ・リードアンドルックアップをすることで文の意味を考えることができる。 ・全体でアクセントや発音を確認したあとにペア同士で言い合うことでより正確なアクセントや発音ができるようになる。 ・先生とは緊張してしまうが、ペア学習になれば間違えても良いと感じることができた。 ・何度も読むことでスラスラ読めるようになり、また語彙の習得ができた。
改善意見	・リスニング穴埋めは 1 回だけでは全て埋めるのが難しいと思うので、数回聞いた方が良い。分からなくても、何となく聞こえた言葉をカタカナでもいいから書かせると力がつく。 ・先に穴埋めをしないと，穴埋めの部分が気になってきちんと英文を聞くことができない。

5) Expressions for Everyday English について

日常会話表現については、文法説明は極力短くし、どのような場面で使用できるかの説明に重点を置き､学生が予習で準備してきた英文をペアの相手を変えながら口頭練習をさせた｡表現を豊かにし、定着を図るため、ペアでやり取りをした相手方の発言をペア活動の後に思い出させて書き留めさせることもあった。

表 7−4 Expressions for Everyday English についてのアンケート結果

【平均値】内容：4.2　方法：4.4

肯定的意見	・周りの人が考えた文章を参考にできるし、自分の語彙や表現の幅を広げられる。 ・自分で英文を作るのは大事だと思った。周りと共有することで自分の英文の誤りを指摘してもらえたり、他の人の英文で「なるほど」と思えたりした。 ・普段使う英語を勉強することによって特に国際大は外国の方が多いので使う場面があった。
改善意見	・テキストで、決まり決まったところだけを書かせるようになっていたため、日常生活に生きるかというと正直書くだけというように感じた。

6) Useful Vocabulary について

テキストを読む前段階として、重要語彙リストの単語 10 個の意味確認を、日本語訳とのマッチングにより行うが、各単語の逐語訳だけでなくイメージスライドを添えることで記憶の定着を図った。また、アクセントがある位置の母音の発音記号や、日本人学習者が苦手とする子音［θ］と［ð］、［θ］と［s］、［v］と［b］、［l］と［r］などは指導者の口元を見せ、何度も繰り返し練習させた。語彙を増やすために、派生語、反意語、接頭辞や接尾辞、語源などもあわせて示した。発音練習の後は、ペアやグループで問題を出し合うことで短期記憶の強化を図った。

表 7－5 Useful Vocabulary についてのアンケート結果

【平均値】内容：4.2　方法：4.4

肯定的意見	・単語とイメージ画像がスライドで表示されたので、早く理解できた。 ・語源を説明するのもとてもいいと思った。 ・本文において重要な単語であると意識することで覚えやすい。全体でアクセントや発音を確認してからペア同士で練習することでより正確なアクセントや発音ができるようになる。
改善意見	・時々、こういう単語の意味は頻繁には使わないのではないか？というのがあったので少し難しく感じた。

7) Reading・Reading Comprehension について

各章の話題に関する 200 字程度のテキストを読むことについては、日本語訳の予習を求めることはしなかった。まずは、スライドや動画を使って簡潔にテキストの内容についてのプレゼンテーションを指導者が行い、学生がすでにもっている情報や一連の背景知識であるスキーマを高めてから読ませるようにした。1 度目は黙読、2 度目は概要に関する 2～3 の英文による質問を示した上での黙読と回答に当たる部分に下線を引かせることによる内容把握。次に、教科書にある内容把握問題 Reading Comprehension を解くための黙読、最後に CD を聞きながらの黙読をさせた。同じテキストの黙読の時間設定を概ね 3 分、2 分半、2 分、CD の速度という具合に徐々に短くすることにより文字情報からの内容理解の負荷を段階的に高めることで、読む力をつけることを意識した。

表 7－6 Reading・Reading Comprehension についてのアンケート結果

【平均値】内容：4.2　方法：3.9

肯定的意見	・どこの部分を質問しているのか、自分で考え線を引くことで、その文章をより深く読み取ることができると思った。 ・違った方法で読むことで、内容理解が深められる。 ・授業を重ねる毎に読むスピードが早くなり、知っている単語が増えるなど、英語力の向上に繋がった。 ・1 回目 2 回目 3 回目と読む時間を短くするのがとても良かった。
改善意見	・黙読の時間に、予習をしてきた学生は暇になることがあり、音読をした方がより頭に残りやすくなる。 ・CD を聞きながらただ黙読するのは勿体無いと思う。CD で聞いた音をシャドーウィングで発音することのほうがさらに効率が良いと思う。 ・自分は、長文読解の際に全訳して解くという学習方法をとっているため、全訳まではなくても重要な文法等は押さえたかった。

8) 英作文発表について

書く力を身に付けさせるとともに自主的な学習に対する意欲を高めるため、次時の授業で扱う内容に関する話題を提示し、自分で調べた事柄と考えや感想とを合わせて 6 文以上の英文を次の授業開始前までに Google フォームで提出することを課した。全部で 14 回の提出を求めたが、学生の平均提出

回数は 12.5 回であった。

教科書の本文や関連 HP、生成 AI による回答例の丸写しを少しでも避けるため、自分の考えや感想を含めるよう繰り返し指導した。また、該当の授業で Reading が終わった段階で、3〜4 人のグループを作りその中で自分の書いてきた英文を各自のスマートフォンの画面を参考に Read & Look Up でグループ内の聞き手に分かりやすく読み上げさせることで、自分の作品としての英作文となることを意識させた。さらに、テキストマイニングにより事前に学生が提出した英作文中の頻出語句の分析や語句の共起傾向をクラス全体で共有するとともに、Reading 活動に入る前の指導者によるプレゼンテーションでテキストマイニングの結果を利用することもあった。

表 7−7 英作文発表についてのアンケート結果

【平均値】内容：4.4　方法：4.3

肯定的意見	・話題に関する予習をすることで内容に入りやすく、自分の考えを持ちながら授業に取り組むことができた。 ・調べることで知識として身につくし、英作文を書くためにテキストの文章を読むので、予習と課題が同時にできる。 ・自分で考え、単語を調べたりしながら行っていたので、自然と単語や文の作り方を学べた。 ・3〜4 人のグループで意見をシェアすると、自分が考えることのできなかった意見を聞くことができる。 ・自分の考える内容を友人に伝えることで、達成感やより分かりやすく伝えたいというような考えを持てる。 ・自分で作った文をしっかりとしたアクセントや発音で読めているのかの確認をペアで指摘し合える。
改善意見	・英文に翻訳してくれるアプリ等もあり、わからない部分はついそちらを使ってしまい、力になっているかわからない。 ・英作文を Google フォームにおくるのが遅れてしまった場合どうすればいいか分からなくなるので改善した方がいいと思った。 ・他のメールに埋もれて取り組むことを忘れてしまったことがあったため、個人的には紙への記入が好ましいと感じた。

9) Writing Exercises について

教科書の最後の部分は、主にテキストからの文法、語彙や表現を使った空所補充による英文完成となっている。予習ないし授業中に書き込んだ答えをペアで確認させ、お互いに教え合いをさせてから、回答例及び解説を示すようにした。

表 7−8 Writing Exercises についてのアンケート結果

【平均値】内容：4.3　方法：4.2

肯定的意見	・予習で分かっていなかったところをペアで解決することで、合っていた時の喜びがあり、楽

	しかった。 ・相手と確認してから答え合わせすることによって、理解がさらに深まると感じた。 ・解説時に細かく説明が書いてあり、分かりやすかった。
改善意見	・空欄補充の時に他の単語も使える時があるので、そのようなことをたくさん知りたい。 ・ペアで確認しても「合っているのかな？」で会話が終わってしまうことがあった。

10) 振り返りについて

授業の最後には、Google フォームを使って授業の振り返りをさせた。内容は「きづいたこと」「できたこと、できるようになったこと」「質問してみたかったこと」「次時にがんばりたいこと」とし、学生のメタ認知を高め、自分の学習に対して責任をもたせ、自己調整しながら学習に取り組むことができるようになることを意図した。同時に、指導者の授業に対するフィードバックにもなり授業改善のヒントになった。

表 7−9 振り返りについてのアンケート結果

【平均値】内容：3.8　方法：4.1

肯定的意見	・質問を気軽にできる。また、目標設定をすることで、自分の意識を高めることができる。 ・毎回、振り返りがあるので、今日は何を気づいたか書けるようにしよう、と意識して授業を受けることで、より積極的に授業に参加できた。 ・次時に頑張りたいことを書くことで、予習から意識することができる。 ・毎回答える度に成長した自分を知ることができる。 ・さまざまな観点からの気づいたことや質問に先生が授業中こたえてくれた。
改善意見	・振り返りに関しては、自己評価で自分がいつでも見返せることができるのであれば、できるようになったことなどポートフォリオのように積み重ねられるが、見ることができないため、感想のみでよかったように思えた。 ・いつもと変わらない内容になってしまい、改善点が見つかりにくかった。

(4) 評価について

評価については、学期末試験、小テスト、英作文の提出、パフォーマンステストを総合して行った。学期末試験は大問 5 題の筆記形式で、英文空所の語句選択補充、語句並べ替え英作文、対話文空所の英文選択補充、50〜100 語程度の英文とタイトルのマッチング、指定された話題から 2 つ選んで 6 文以上書く自由英作文とした。

パフォーマンステストは二部構成とし、一つは、授業で毎時間行っている教科書の対話文をペアになって Read ＆Look Up で読むこと、もう一つは個人の自己紹介とそれに関する教員の問いに対して答える内容とした。教科書の音読は、文部科学省による調査においては「パフォーマンステスト」には当たらないが、文字を認識して、意味内容を理解しながら音声化する訓練の成果を見たいと考えて行った。

自己紹介については、お互いのことをまだあまり知らない 1 年次前期であることから場面設定としては自然であると思われる。授業で席替えを行った際は、当分の間、授業の最初に隣、前後、斜めの

パートナーという具合に相手を変えて自己紹介をさせた。小学校の英語の授業で使える表現を意識し、単に “I’m ～.”だけでなく“My hobby is ～.” “My favorite subject is ～.” “～ makes me happy/excited.” “It is important / necessary for me to ～”などの表現の例を事前に全体に示した。さらに、自己紹介の内容について相手に質問し会話を発展させるよう促した。

パフォーマンステストにおいては、多様な表現を使って自己紹介ができるかということと、その内容についての指導者からの質問に対する回答の分量と内容に基づいて評価した。自己紹介については、小学校の英語の授業での児童や ALT に対する自己紹介を想定しただけでなく、宮崎県の教員採用選考二次試験の面接対応にも有効であると思われる内容を意識した。表 8 は評価についてのアンケート結果である。

表 8 評価についてのアンケート結果

【平均値】内容：4.3　方法：4.3

肯定的意見	・1 つや 2 つで評価が決まるのではなく、複数のテストによって評価が決まるので良い。 ・大学講義として、教員養成課程として、必要な力をそのまま評価されているように感じ、妥当であると考える。 ・評価の観点が事前に具体的に挙げられていた。 ・文法や単語、長文読解だけに限らず、パフォーマンステストによって話す力も身につくと思った。 ・どれも普段の予習復習が大切になってくる。
改善意見	・内容理解を授業でもう少し詳しくすると良かったと思う。 ・小テストは前回の授業がどれだけ理解できているか自分が確認するためにしていると思うので、評価に入れてほしくない。

５．おわりに

本学における大学入門期の英語の授業実践について報告することを目的に、2023 年度前期に実施した教養科目「英語Ⅰ」の授業内容と学生アンケート結果を示した。学生の英語に対する姿勢が良い方向に変わることを念頭に置いて、本学のカリキュラム・ポリシーとディプロマ・ポリシーを踏まえ、今後の英語の学修につながっていく授業づくりを心掛けた。具体的には、アクティブラーニングを取り入れた技能統合型の活動を中心とし、一斉指導とペアやグループでの協働的な学びのバランスをとるようにした。ICT の活用については、指導者からのプレゼンテーションソフトによる教材の提示と学生のスマートフォンによる小テスト受験、英作文の提出、振り返り入力にとどまっている現状にある。今後、ICT 機器の活用の幅を学生が広げられるような授業づくりについての工夫と実践が課題である。

謝辞

本研究のアンケート調査にご協力いただきました、2023 年度「英語Ⅰ」履修者の皆さまに心より感謝申し上げます。

引用および参考文献

尾関直子(2013).「CAN-DO リストと自律した学習者」,『東北学院大学論集』7 巻，pp.147−158.

文部科学省(2018).「教育振興基本計画」（第 3 期）, (参照 2018-06-15)

東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所.「高 3 生の英語学習に関する調査」,
https://berd.benesse.jp/up_images/research/kousaneigo2021.pdf，(参照 2022-03-25)

文部科学省(2018).『小学校学習指導要領解説　外国語活動・外国語編』

宮崎国際大学(2023).『2023 履修案内 教育学部』

文部科学省.「令和４年度英語教育実施状況調査の報告について」,
https://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1415043_00004.htm,（参照 2023-05-17）

Paul Chris Mcvay・川田伸道(2023).『Let’s Check Out the UK!』,金星堂.